名古屋学院大学論集　人文・自然科学篇　第55巻　第2号　pp. 173–183

〔論文〕

キリスト教学校における教材分析

――天地創造物語を中心に宗教と科学の対話――[1)]

神　山　美奈子

名古屋学院大学商学部

要　　旨

創世記1章1節から2章4節aにおける「天地創造物語」に関して，1910年代から戦後にいたるまで日本のプロテスタント・キリスト教学校（中学校及び高等学校）で用いられてきた聖書科の教材を科学との対話に焦点をあてて比較分析し，その傾向を考察する。

キーワード：キリスト教，宗教，キリスト教学校，聖書，教育

Analysis of textbooks in mission schools

――The dialogue between religion and science, focusing on the Creation story――

Minako KAMIYAMA

Faculty of Commerce
Nagoya Gakuin University

1）　本論文は，2015年9月17日に南山大学宗教研究所TRSカリ検研究会で行われた筆者による口頭発表文「キリスト教学校における教材分析―天地創造物語を中心に宗教と科学の対話―」に訂正を加え，加算したものである。

発行日　2019年1月31日

1. はじめに

「初めに，神は天地を創造された」[2]（創世記1：1），この言葉で聖書ははじまる。人間を含むすべてが神の被造物であるという聖書の理解は，科学とどのような対話をなしてきたのか。本論文では，特に創世記1章1節から2章4節ａにおける「天地創造物語」に関して，日本のプロテスタント・キリスト教学校（中学校及び高等学校）で用いられてきた聖書科の教材[3]を科学との対話に焦点をあてて比較分析し，その傾向を考察する。分析は次の三つの時期に分けて試みる。

1，1945年の敗戦前に発行された聖書科教材
2，1945年から1970年代に発行された聖書科教材
3，1980年以降に発行された聖書科教材

教材の中には科学との対話について全く記述のないものもあり，これらに関しては今回扱っていない。扱った教材について予め先に記し，その後，記述内容を表にして比較することとする。

2. 1945年（敗戦）以前の聖書科教材

〈比較分析する教材〉（年代順）

①山室軍平編「聖書教科書：小隊候補生」救世軍日本々営，1916年
②山口金作「旧約聖書教科書：創世記」警醒社書店，1918年
③ウオーター・ダブリユー・ムーア，エドワード・マツク 著［他］「旧約聖書総論」日本日曜学校協会本部，1922年
④日本日曜学校協会文学委員編「旧約建国物語：中等科教案，第1•2学期分」日本日曜学校協会出版部，1927年

教材番号	記述項目（ページ）	記　述　内　容（下線は筆者による）
①	原始時代–創造（5）	「創世記第一章は恐らく世界で最も古い書き物の一部であろう。これは科学的の真理を教へん為に書いたものではない。併し之を読めば万物が神様に由りて造られたるものであることを充分に会得することが出来る。不完全，不充分ではあるけれども，その述べるところは真であり又正確である。（略）神様の創造の能力については物質（一

2）『聖書新共同訳』日本聖書協会，2016年，旧約聖書1頁。
3）キリスト教学校教育同盟関係及び日本基督教団出版局が発行したものなどを中心とする。キリスト教学校教育同盟は，日本のプロテスタント・キリスト教学校102学校法人によって組織され，共通する問題を研究し，互いの進歩・発展を図る目的で活動している団体である。：キリスト教学校教育同盟のH.P.であるhttp://www.k-doumei.or.jp/を参照。（2018年10月現在）

		節），生命（二十，二十一）及び人間（二十七）の事を語って居る丈けである―此の三つは最も進歩した近世の科学も未だ説明し能はざる謎である。」
②	人類の創造 （3）	「［注意］大人部生徒の為には創世記第一章以下に記される「神六日にして天地を造り給へり」との記事を研究せしむべきであると思ふ。而して生徒をして其れと本課の文章との間に如何なる差別あるかを知らしむる必要がある。本課の物語は最も古き資料［J古典］によるもので思想幼稚なるが如きも尚，深き趣味と教訓とに富んだものである。故に注意して生徒に其意味を了解せしむる必要がある。」
	人の罪 （7以下）	「［注意］本課の文章は前課の物語に続くものにして，最初の人間が如何にして誘惑せられたかを語るのである。科学的に見れば甚だ幼稚なる記事なれども，尚深き趣味と教訓とに富んでゐる。」
③	諸民族時代―人間歴史の端緒（22）	「世界の開闢（かいびゃく）を記せる創世記第一章は，実に聖書中に於ける一大奇跡である。而して，其の出来事の順序に関しては，大体は科学の認める所と同様であって地上に於ける生物発達上の普通唱導せられて居る順序と略ぼ其の符節を合わせて居る。彼の無限の霊が原始的の水面を蔽ふたといふ事も，今日の科学者にした所が，此の記録に対して挑戦すべく何等確実なる論拠を見出し得ぬ程であつて，ましてや当時の記述者自身に於ても毫末も其の念頭に遅疑する所が無かったのである。」
④	世界の始め―研究 （2以下）	「天地創造の記事の精神は，存在する所のものは夫自身成長したものでなく，寮智と第一意志に依て形式された即ち一の創造であると云ふことである。如何に人智が進んで種々の発明発見があったにせよ，存在全体としての根本問題になる，其答は依然として前述の範囲外に出ないのである。故に此記事は決して架空若しくは背理を語ってゐるのでなく，如上の真理にやわしい衣を着せて表現したものである。此記事は素より歴史的研究とか，地理的論説とか云ふものでなく，寧ろそれは神と其被造物を讃美した詩であって，殊に造物主と人間の親縁関係を顕はさんとしたものと観る　べきである。」

〈要点の整理〉

1910年から20年代における聖書科の教科書は，全体的に天地創造物語が科学的根拠をもとに記されたものではなく，神による創造世界を「讃美」する意味を持つものであることを強調しているが，そこには科学との緊張関係をみせていることが確認できる。例えば，教材①「近世の科学も未だ説明し能はざる謎」，教材②「科学的に見れば甚だ幼稚なる記事なれども，尚深き趣味と教訓とに富んでゐる」，教材③「其の出来事の順序に関しては，大体は科学の認める所と同様」，教材④「此記事は素より歴史的研究とか，地理的論説とか云ふものでなく，寧ろそれは神と其被造物を讃美した詩」などといった表現によって科学と天地創造物語の接点をみつけようと模索している様子がうかがえる。

このように聖書科の教科書をめぐって宗教と科学の接点をみつけようと模索する中で，上記の教科書が出版される前に内村鑑三が宗教と科学の接点について次のように述べている。

人は宗教と科学との衝突を道ふ，然れども我は未だ其の是れあるを認むる能はず，宗教は霊

界の科学的考究の結果と称ふるを得べく，科学は物界の宗教的観察と称ふも可なり[4]。（略）

故に如何なる点に於ても，科学は宗教の補助者なり，否な，補助者なるのみならず，宗教は一種の科学なり[5]。（略）

科学は，宗教の補助者なるが如く，宗教は科学に研究の精神を供す。所謂両者の衝突なるものは，宗教が其方法を科学に強ひし時か，又は科学が其精神を宗教に適用せんと欲せし時に起りしものなり[6]，

また，創世記1章に記された天地創造物語を通して宗教と科学の接点を見出そうと次のように語る。

聖書は本来科学の教科書ではない，聖書は天然に就ては其の道徳的又は信仰的方面を教ふるものである，神と天然との関係如何，神の子は如何に天然を見るべき乎，之れ聖書の明かにせんと欲する所である，而して此立場よりして我等は科学の示す能はざる多くの貴き真理を聖書より学ぶのである[7]，

内村の言説をみても，宗教と科学に接点を見出すことが模索状態にあることがわかるが，内村の場合は本来宗教と科学が衝突するものではなく，それぞれの「立場」があり，聖書の真理を科学は示すことができないと述べている。このような見解が敗戦前の聖書科教科書にも影響を与えたと考えることができる。

3. 1945年から70年代に発行された聖書科教材

〈比較分析する教材〉（年代順）

⑤基督教教育同盟会編，相浦忠雄著「聖書の理解」創元社，1949年
⑥基督教学校教育同盟編「聖書教科書Ⅳ聖書入門」創元社，1959年初版，1961年3版
⑦基督教学校教育同盟編「聖書教科書Ⅶキリスト教の要義」創元社，1959年初版，1954年6版
⑧今橋朗「私たちの『創世記』―高校生のための「創世記講解」―」新教出版社，1967年
⑨原栄「聖書の人間Ⅱ旧約に学ぶ人間像」新教出版社，1975年初版，1977年3版
　⇒1992年改訂第1版も同様の内容。
⑩川村輝典「キリスト教入門Ⅰ聖書」日本基督教団出版局，1977年

4） 内村鑑三「宗教と科学」，『内村鑑三全集』，第6巻，岩波書店，1980年，95頁。この記事は『東京独立雑誌』6号（1898年8月）に掲載されたものである。
5） 内村鑑三，同書，96頁。
6） 内村鑑三，同書，104頁。
7） 内村鑑三「宗教と科学　創世記第一章の研究」，『内村鑑三全集』，第24巻，岩波書店，1982年，512頁。この記事は『聖書之研究』224・225号（1919年3月・4月）に掲載されたものである。

教材番号	記述項目（ページ）	記　述　内　容（下線は筆者による）
⑤	律法(五書)—歴史的部分(19以下)	「創世記の記者はここに単なる人類史を書かんと意図したのではなく，創造物語も人類史も，みなイスラエル民族の立場を中心とした歴史観によって書かれてあるのであって，多くは神話の形式をとっており，必ずしも史学的考証や科学的正確を考慮に入れていない。目的は神が一切の造物主であり，歴史を支配し，歴史の中に意志を遂行し給うということを高調することにある。謂わば，一般世界史も人類史もみな選民イスラエル民族出現のための伏線として書かれたとも言えるが，勿論その中にある記者の歴史観・世界観も看過してはならない。」 「創世記の内容は創造物語，始祖物語によって満たされているが，既述せる如く，これは単なる神話や歴史物語ではなく，その背後には世界観・歴史観が潜んでおり，共に記者の神観から発している。」
⑥	天地創造説（55）	「神がみずからを人類に啓(ひら)き示し，天地の道理を示すにあたって，まずはじめに，神の天地創造のわざを人類に示すことは，まことに理由のあることである。これ天地の創造ということは，神の御意(みこころ)の発動（創る者の働き）と宇宙万物の存在（創られたものの存在）とが明らかにされるところの神の業であるからである。（略）この天地創造説は，今日の進化論的天地創造論に一致しないにしても，科学的理念の発達していなかった古代の宗教的天才の，天地の神の全知全能な働きに対する敬虔な理念と情操からほとばしり出た偉大な宗教的想像の所産として，尊敬に価するところのものである。」
⑦	創造の神（42以下）	「創造は，どこまでも信仰上の告白である。（略）われわれは「信仰によって」のみ，この世界が神によって造られたことを悟るのである。」 「創造の神の信仰は，近代の科学の立場と，必ずしも矛盾するものでないことについて一言しよう。いったい科学は，どこまでも客観的な態度で，世界のいろいろな現象の法則や構造を明らかにしようとするものであって，決してそれ以上に出るものではない。つまり科学は，世界内の現象を観察し，分析し，解明し，記述するにとどまって，それ以上に，世界が全体として，何を根拠としているのか，何を目的としているか，というような問題に解釈を下すものではない。科学は，あくまで実証的であり，合理的であり，またそうあるべきである。そこで科学が，現象の説明を越えて，世界の存在根拠や目的にかかわる究極的な問題について容喙(ようかい)するとすれば，それは科学の全く不当な越権といわなければならない。科学，したがって科学者は，このような問題に関して沈黙をまもり，判断を下さないことが正しい。これに対して，創造の信仰は，すでに注意したように，どこまでも信仰上のことがらである。神を第一義的存在と信じ，この世界が全体として究極的に，神，その力その愛を根拠としていると告白することが，創造の信仰である。それは明らかに科学の立場とは異なって，むしろこれを越えて成り立つのである。信仰と科学とは，いわば次元を異にする。信仰もまた科学的な問題に容喙してはならない。つまり，信仰が科学の立場を認めるように，科学も信仰の立場を認めなくてはならない。もし両者が対立し矛盾するとすれば，それいずれかが，越権的な行為をあえてするからであり，自己の分を謙虚にまもらないからであるといえよう。」
⑧	創造（12以下）	「『創世記』は，世界と人間のほんとうの根本・土台は何かを語ろうとしています。ですから，〈はじめに〉と『創世記』が書き出すとき，それを〈昔々〉の意味にとってはなりません。そうでないと〈それは何万年ぐらい昔か。何億年以前のことなのか？〉

		などと考えたくなってしまって，聖書がほんとうに語り伝えたいと願っている目的から，はずれていってしまうのです。わたしたちが日常生活の表面だけを見て物事を判断したり，自然科学の知識だけですべてを説明しようとする，悪いくせがすぐに出てきて，『創世記』のみことばをも，そんなふうにとりあつかうことは，聖書の正しい読み方とはいえません。」
⑨	天地創造 （11以下）	「わたしたちは，この天地創造物語は，現代の自然科学的宇宙論と矛盾するではないかという疑問をもつであろう。この物語は，科学を知らなかった古代人にはありがたいものであったかもしれないが，現代に生きる人間には無意味なものであろうか。」 「自然科学が究明しようとすることは，自然現象の生成過程についての客観的な事実の解明である。それに対して聖書の記している創造物語は，天地の起源という人類共通の興味あるテーマを素材として，この世界の存在の意味や，人間の生きる目的について語ろうとしているのである。」 「この創造物語には，いくつかのデフォルメともいえる奇妙な表現があり，むしろそれを解明することによって，この物語が訴えようとする宗教的真理を明らかにすることができるであろう。」
⑩	世界と人間の創造 （56以下）	「（創世記の）最初の三章は，いわゆる創造物語と呼ばれ，（略）その表現は古代人の筆によるものだから，当然当時の人々の世界観が反映しており，神話的表象も見られるのであるが，われわれはそれらの制約を越えて，なお普遍的に意味のあるものを，その中から見出すことができるのである。それはこの世界または歴史の性格，人間の存在の意味といったことなどである。」 「天と地という言い方は，古代人の表現による全宇宙を指す。私たちが生きている宇宙，世界は，聖書によれば自然発生的なものではなく，あくまでも造られたもの，被造物にすぎないのであって，それ自体では活動しえないのである。この世界はそれ自体究極的なものではなく，相対的なものにすぎない。」

〈要点の整理〉

1945年以降の教材では，教材⑥に関してはその傾向が若干弱く感じられるものの，1945年より前のものとは異なり天地創造物語と科学との緊張関係や葛藤から抜け出し，あくまでもこの関係が異なる次元で語られるもので，そこに矛盾を見出すことはむしろナンセンスであるということを強調する。この点，上述した内村の見解を踏襲する形となっている。特に天地創造物語の重要な点は，歴史の中で起こる客観的な事実の解明ではなく，この世界の存在理由，人間の存在理由と生きる目的，何よりもそのすべてを神が創造し，支配されること，神の絶対的な存在と歴史への介入を語るところにあると，明確に示している。

4. 1980年以降に発行された聖書科教材

〈比較分析する教材〉（年代順）

⑪目黒摩天雄「私たちの生き方―キリスト教の知恵」燦葉出版社，1982年

⑫小島章弘「キリスト教入門ジュニア版　文化を探る」日本基督教団出版局，1984年

⑬二瓶浄幸「わたしたちの旧約聖書」日本キリスト教団出版局，1989年

⑭久保田純一「共に生きた一人」新教出版社，1991年
⑮原栄「聖書と人間Ⅲ現代に生きる人間像」新教出版社，1992年
⑯キリスト教学校教育同盟編「新編　旧約聖書の教え―キリストへの出発―」創元社，1993年
⑰磯貝暁成「生きるってなんだ2旧約聖書に学ぶ」新教出版社，1996年
⑱後藤田典子「キリスト教との出会い　旧約聖書」日本キリスト教団出版局，2002年
⑲桜井希「共に生きる」日本キリスト教団出版局，2010年

教材番号	記述項目（ページ）	記　述　内　容（下線は筆者による）
⑪	天地創造（21以下）	「『創世記』の第一章には，童話のような形で，世界とそこにあるものはすべて，神の考えがあって創造されたことが，まとめて述べられています。そこでは，神が六日間で天地万物を創造されたように描かれています。（略）これは，宇宙の進化についての科学的な説明でないことはすぐに気がつきます。」 「研究課題　三，神が天地を創造したということは，宇宙の進化と矛盾するだろうか。」
⑫	人間は考える葦である―キリスト教と自然科学―それでも地球はまわる(6以下)	「宇宙カレンダーによるビッグ・バンから人間の誕生までは45億年を要しているのに比べて，神は8日間ですべてを仕上げている。これは明らかに矛盾しているといわねばならない。聖書が記しているものと科学が証明してきたものとは対立をすることになる。聖書はウソをいっているのだろうか。聖書の見方は科学によって否定されてしまうのだろうか。（略）神は全知全能であり，この世のすべてが神によって造られたという信仰を述べているのである。だからどのような順序で，何年間で地球が創造されたのかということを聖書に求めることはできない。信仰的真実として見なければならない。（略）聖書によって宇宙の生成を説明したり，証明することはできない。また逆に科学的に証明されたことがすべてであるというように思いあがってもならない。おそらくこの世のすべてを科学によって明らかにすることは困難であろう。そこで聖書の信仰の世界と科学の証明とを矛盾するもの，対立するものと見るのではなく，はっきり区別することが大切なのである。その区別がつかないと聖書を正しく読むことができないし，物事を科学的に見ることができなくなる。聖書は神との関係の中で人間の生命の尊さと生きる意味とを示している。科学はあくまでも仮説の上に成り立つものであるから絶対的なものとしてはならない。聖書は神に対する信仰の上に立っているものであるが，科学は冷静に事実を事実として承認することによって成り立つものである。」
⑬	世界のはじまり―創造（14以下）	「これは理科や社会で学んできたものと違うと感じた人がいるかもしれない。まるでおとぎ話のようで，信じられないと感じた人もいることだろう。それは聖書が，科学的な基準とは全く別の基準によって記されているからである。聖書は科学のように，ことがらの「理由」を説明しようとしているのではなく，わたしたちが神や世界や人間と，どのようにかかわったら良いのか，一言でいえば，わたしたちの「生きる意味」を問題にしているからである。」 「【補足】天地創造ではじまる創世記は，大きく2つに分けられる。まず，1章から11章までは聖書の民「イスラエル民族」に伝えられていた伝説であった，実際にあったできごとではなく，「神話」の部分である。ここには人間の本質や，人類の運命が，「予言的」に描かれている。そして12章から50章には，イスラエル民族の「歴史」の出発点が記されている。」

⑭	神の創造―天地創造（18以下）	「この箇所は私たちがふつう「歴史」と言われるものとひじょうに異なっています。一般的な「歴史」という言葉で言いきれない内容をもっています。そこで，これが適当な言葉であると言えないにしても，これを「神話」といってもよいのではないかと思います。「神話」といいますと，なにか昔の伝説，ありもしない話，夢物語のように考える人がいると思いますが，ここで言う「神話」とは，そのようなものではないのです。そして単なる寓話でもありません。聖書では，「神話」とは神という超人的存在についての物語です。天地創造が「神話」として書かれているということは，誰も見たこともない，誰も体験したこともないことを，自分の思想と神への信仰，時間と空間の中での生活の経験をとおし，創造しながら述べたことなのです。（略）聖書の記者が，この世界をどのように見，どのように考え理解してきたか，人間はなぜ生まれてきてなぜ生きるのか，そして，いったい人間とは何かを問うているのです。」
⑮	人間を見つめて―知恵ある人―ヘレニズムとヘブライズム（17以下）	「ヘレニズムとヘブライズムは，ヨーロッパの文化形成にいろいろな形でかかわり合ったが，「科学と宗教の闘争」という不幸な関係を生んだこともある。日本では，近代科学の先駆者たちを弾圧したのはキリスト教であったと容易に考える人が多い。しかしこの両者の関係はそんな簡単なものでなく，コペルニクスをはじめ，ガリレオにしても神の創造された宇宙を解明するという信仰的動機から始められたのである（村上陽一郎『科学・哲学・信仰』第三文明社）。 それは，理性と信仰，科学と宗教をどのようにとらえるかという深い問題を含んでいる。ヘレニズムに立つ人間理性の追求から生まれた科学によって，人類は多くの迷信から解放されたし，科学的真理が解明されてきた。しかし正しい信仰を忘れた人間が，科学の力に信頼して歩もうとする時，それは「科学万能主義」という一種の迷信におちいり，かえって人間を不幸にするだろう。そこにヘブライズムの科学に対する使命がある。聖書は，自己絶対化，悪魔化におちいろうとする人間とその科学に対して，神の前に人間の謙遜と科学の限界を教え，人類にほんとうに貢献できる科学をつくり出す力，すなわち科学的精神，学問的精神を生み出すであろう。そして近代科学が成立し得たのは，キリスト教，ことにプロテスタンティズムを精神的土壌としたヨーロッパであったという歴史的事情を忘れてはならない（マックス・ウェーバー）。」
⑯	イスラエル民族の神話―天地創造（創世記1：1～2：7）（14） イスラエル民族の神話（まとめの部分19）	「「初めに，神は天地を創造された」（創世記1：1）。この言葉は聖書の一番最初の言葉です。イスラエル民族の神話は，神が言葉によって順序正しく万物を創造したことから始まります。」 「創世記1–11章に記されたイスラエル民族の神話は，古代オリエントの神話の影響を受けています。しかしそれらはイスラエル民族の信仰に基づいて作り変えられて，人類の遺産となりました。そしてそれは人間が神を忘れ，人間の力を過信した時に必ず悲惨な滅亡を招くということを警告しています。世界平和をめざす現代は，科学技術の高度な発達による環境問題，医療問題などをかかえていますが，創世記1–11章のメッセージは，現代の諸問題に対して貴重な示唆を与えるものとなっています。」
⑰	第1章　有りて有る者「人間とは何者なのか」	「文学は人間とは何者なのかを語ります。科学もまた人間はいかなる者かという問いに答えます。心理学もまた人間の疑問に答えを与えます。ではキリスト教は人間を何者ととらえるのでしょうか。（略）聖書は，人間がどのような道をたどりながら自分自身を『神に創造された何にも代え難い者』と理解するに至ったかを語っていると

	(28)	言えます。つまり神に創造された何にも代え難い自身をどのように生きるかが，人間の生きる目的であると聖書は訴えているのです。」
	第2章　私は何者なのか―天地創造1章1節(31)	「人間を含むすべての世界は神によって創造されたという考え方には，現実の社会の『人間を絶対とする考え方（自己中心的な考え方）』の否定が語られているのです。そこに世界の秩序の基が存在し，逆に世界の秩序が破壊されるのは，人間を絶対とする考え方から起こっていると語るのです。これを聖書は罪と語っています。聖書の語る罪とはこの一点を指すのです。」
⑱	第2章　原点を見つめる 1すべての始まり―天地創造の主題（18）	「創世記は，先に述べたように，最初に，神が天地万物を創られたことを語っている。全ての始まりは神にあり，全ては唯一の神が創られた，と語りかける。P資料を書いた祭司たちは,天地の全てを唯一神が創造したのだ,との確信を持っていた。その当時,彼らは敗戦のため捕囚民となっており，捕らわれた地バビロニアは，太陽や大地を神とする多くの神々を崇める国として権力を誇っていたのだ。けれども，彼らは唯一神の天地万物の創造を信じ，そこにバビロニア帝国に屈しないアイデンティティーを築いていったのである。」
	―創られた天地（19）	「ここでの1日は，わたしたちが考えるような24時間という時間と言うよりも，一つの単位と考えた方が良いだろう。ここで聖書を書いた祭司が伝えたいことは，科学的な天地の由来ではないのだから。祭司たちは，混沌とし，闇におおわれていても，そこに神の手が働いて世界が創られるさまを伝えようとした。背後には，イスラエルの民が滅びた祖国から捕囚としてバビロニアに連行されている，という『混沌と闇の現実』がある。」
⑲	神の似姿として―私たちへの問いかけ（11）	「科学技術の進歩によって，自然や命のしくみは，ますます解明されていくでしょう。けれども，なぜそれらが存在するのかという問いに立ち帰ってみると，この命は人間を超えた何ものかによって与えられていることに思い至ります。神による天地の創造は，神と人間の関係が逆転した時代を生きた人々によって語り継がれてきました。物語は今も，人間がこの世の主人であるかのようにふるまう時代を問い続けているのです。」

〈要点の整理〉

1980年以降は，その前段階である敗戦後の教材を土台に科学との対話をより積極的，肯定的に表現していることがわかる。天地創造物語が伝えたいところは，神とは何者か，創られた人間とは何者か，という問いに対する答えである。ここでもやはり，事実を証明しようとする科学とは異なる基準によって，人間の生きる意味，神によって生かされている存在として「生きる」ことについて聖書が語っていることを指摘している。また，教材⑮，⑯，⑰，⑲のように以前の教材とは異なり，科学技術の発展による問題点を指摘し，そこから生まれる人間の罪にまで言及していることが新しく付け足された点として読み取ることができる。

4. おわりに―教育現場での限界と課題

本論文では，プロテスタント・キリスト教学校（中学校及び高等学校）で用いられている聖書科教

材を取り上げたが，実際に教育現場ではこれらの教科書がどれほど使用されているかに関しては疑問が残る。たとえ教科書に宗教と科学との対話に関する内容があったとしても，担当する教師が教授するか否かという個人的なレベルで考えなければならない。同じ教科書を用いたとしても，授業の内容はその教師の聖書解釈によって異なるのと同様に，教師に委ねられているのが聖書科の授業といえる。そのように考えると，教師がこれまでどこで，どのような聖書解釈を学び，培ってきたかということが重要になる。

本論文で取り上げた聖書科教科書を三つの時期に分けたが，宗教と科学の対話に焦点をあててみると，第一の時期では「葛藤」が，第二の時期では「克服」が，そして第三の時期においては「展開」がみられた。全体を通して「天地創造物語」を一つの神話として捉え，この神話が私たちに何を伝えようとしているのか，そして天地創造物語と科学は対立する構造にあるのではなく，互いに異なる次元で語られていることを理解した上で天地創造物語を読み，解釈していくことを勧めていると言える。つまり，宗教と科学の対話においては「対立構造」ではないということを前提に，それ以外は現場の教師の自由な解釈が授業で用いられることとなる。

これまでプロテスタント・キリスト教学校では聖書科の教科書作成に関して多くの討論，協力体制がなされてきた。特に，1910年に発足したキリスト教学校教育同盟（当時の名称は基督教教育同盟会）は第一回総会における参加校は10校であったが，その後徐々に参加校が増えていった[8]。その中で聖書科教書編纂に関する話し合いがなされていく。ただし，「当初の関心はどのように聖書を教えるかという教授法に集中しており，教材そのものの開発という発想は当時必ずしも明瞭に意識されていなかった。」[9] その後，1933年に初めて編纂された中等科の聖書科教科書が発刊された。これに関する執筆者と教科書題目は以下の通り。

1933年	都田恒太郎	『聖書科教科書―旧約の人物』
	小出正吾	『聖書教科書―イエス伝』
1936年	千葉勇五郎	『聖書教科書―パウロ伝』

当時この3巻本聖書教科書は，加盟校の約半数が採用していたという[10]。以降，再び編纂作業がなされ，1938年から39年にかけて以下の通り全5巻の聖書教科書の編纂が完結した[11]。

1938年	第1巻	都田恒太郎	『旧約の人物』
	第2巻	森田俊作	『イエス伝』
	第3巻	千葉勇五郎	『パウロ伝』

8） キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会編『キリスト教学校教育同盟百年史』，キリスト教学校教育同盟，2012年，66頁参照。

9） 同書，108頁。

10）同書，109–110頁参照。

11）同書，122–123頁参照。

	第4巻	都留仙次	『預言者と其教訓』
1939年	第5巻	本宮弥兵衛	『イエスの教訓』

またこの時期，キリスト教学校と「教会との連絡」に関しても話し合いが持たれ，「宿題として教会出席を勧め，説教の概要を書かせて提出させるとか，祈祷週間を設けて教会への連絡を計る」[12]など，現在のキリスト教学校にも受け継がれている「教会との連絡」を模索する姿をうかがい知ることができる。

聖書科教師によるこのような実践と話し合いが，現在のキリスト教学校にも多分に影響を与えていることは言うまでもない。しかし，現在では前述したように聖書科教科書は多様な形をとっている。とは言え，天地創造物語の解釈にみられるように，宗教と科学の対話という観点からみた場合，「対立する構造」を前提としないという共通点を持っている。このような点から，日本におけるプロテスタント・キリスト教学校の聖書科教材，中でも天地創造物語における宗教と科学の対話は，早い時期に発行された教材には「葛藤」が見られるものの対立構造にあるのではなく，全般的に積極的に対話を促す方向にあったと結論づけることができる。

12） 同書，124頁。